Column

エネルギーの源 ㉙

山がつくり出す自然美と恵み

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授
一般社団法人 洸楓座 代表理事
佐藤 建吉

やま（山）は、周囲より高い所をいうが、日常暮らす場所を越え、神や魂が住む聖地として崇められ、山岳信仰となってもいる。日本では、私の郷里の山形県の出羽三山（月山・羽黒山、湯殿山）は代表である。また、ヒマラヤ山脈を背景とするチベットやアンデス山脈をいただくペルーなど、世界の各地においても自然崇拝の対象である。深山幽谷、未踏の地が、その対象とされ、畏敬の念が込められている。同時にその景観がつくる自然美も尊厳の対象である。

日本の国土面積の66％は森林面積であり、バイオマス資源としての高い潜在性を教えてくれる。森林は光合成により、地球温暖化防止に貢献している。二酸化炭素の地球における濃度は、産業革命を契機として年々上昇している。その右上がりの二酸化炭素濃度を示すカーブには、図のように一年毎に増減するギザギザがある。それは、夏と冬に、樹木の葉が行う光合成に関係しているという。夏は葉が茂り、冬は葉が落ちるためである。北半球と南半球では夏冬が反対であるが、陸地面積は圧倒的に北半球が広いので、図のような結果になる。地球が呼吸しているという表現があるが、人間とは異なり、地球は二酸化炭素を吸っている。

今年の1月末、北山杉の里、京都市北区中川を訪ねた。その地は、川端康成の小説『古都』に綴られている山里である。山陰本線花園駅で迎えて頂いたのは、北山杉の老舗の中田林業の社長、中田明氏である。本誌の第15号（2014年12月15日）で解説した「ピラミッド風車」を北山杉で造るプロジェクトの打ち合わせに伺った。

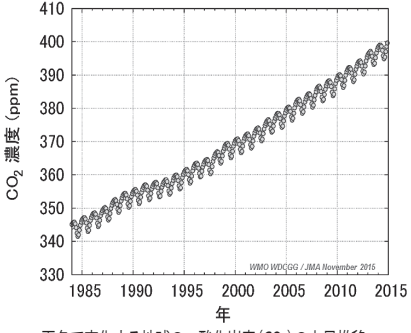
当日、中田氏がまず案内して下さったのは、宗蓮寺の近くにある樹齢500年といわれる「北山杉の台杉」であった。一本の杉の株から10本ほどの細い北山杉の立ち木が伸びているもので、年月と人手が作り上げた自然美をつくり出していた。

北山杉は、和室の床柱などに使われる銘木として有名である。北山杉は磨丸太と、絞り丸太がある。前者はつるつるに磨かれた丸太を指す。後者は成長時にワイヤで丸太の外表面をぐるぐる巻きに拘束して育て、丸太の皮を剥ぐと表面に独特の皺（しわ）ができた丸太をいう。その皺状のテクスチャーがワイヤなどを巻くことなし天然にできた突然変異の北山杉を中田氏の祖父が発見し、これを自社ブランド「天然出絞」（てんねんでしぼり）と呼び、代々継承している。

北山杉の丸太磨き作業は、『古都』に描かれた時代は砂を用いて手作業で行われていたというが、いまは水圧ジェットで行われる。いずれにしても手作業を要するもので、丸太の持つテクスチャーや色や輝きが、銘木としての価値を生む。高価な銘木を用いた自宅座敷に、客人を迎え入れることが至高の接待とされた時代から、最近はホテルやレストランでの接待が歓迎されるようになり、北山杉の利用も減り、北山杉の山林も手が加えられないものも出てきている。北山杉以外の山林では放置されているものが多く、林業の危機が叫ばれて久しい。

最近、バイオマス発電の事業化が進み、山林にも手が入れられてきた。また、用材として活用される局面も出てきた。これは、歓迎されることである。バイオマス発電の燃料として、間伐材や破材が有効に利活用される体系が、山主・林業家と発電事業者で構築されることを望みたい。

筆者は、25年前に房総の海辺近くにログハウスを購入し、木質住宅の良さを享受してきた。残念ながら北山杉は用いていないが、木の香りや柔らかさは体験済みである。京都の北山杉の山林は、人工林であるが、自然美としても至高のものである。自然の中で暮らし、生きることが一番の贅沢、との想いを文化にしたい。山林や森林の美しさを保つことは、地球環境に貢献することでもある。「北山杉でつくるピラミッド風車」が、ここで述べた北山杉や風車などの社会受容性を高めることになればと考えている。



夏冬で変化する地球の二酸化炭素（CO_2）の上昇推移
http://ds.data.jma.go.jp/ghg/kanshi/ghgp/co2_trend.html